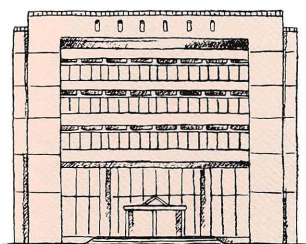


西南学院大学



図書館報

No.

147

1999.10

『国際協力シンポジウムを 本学で開催』



平成11年6月30日(水)国際協力のいろいろな形について討論が行われた
(4～5ページに関連記事)

目 次

利用しやすい図書館を作ろう

一新しく館長に就任して…………… 図 書 館 長 古 賀 衛 …… 2

福岡タワー展望室で語る歴史と史料…………… 文学部国際文化学科教授 長 洋 一 …… 3

シンポジウム報告

「21世紀に向けた国際協力と市民社会」…………… 4～5

—NGOの役割、政府の役割—

図書館で使える CD-ROM …… 6

新着図書・視聴覚資料紹介・お知らせ…………… 7～8



利用しやすい図書館を作ろう

—新しく館長に就任して—

図書館長 古賀 衛

リクルート社発行の『自分にいい大学がわかる本』は、項目別にどの大学が優れているかを、ベスト20位までランキングしています。学生アンケートによる全国約250の国公立大学の比較ですが、本学は「開館時間や貸し出しサービスなど図書館が利用しやすい大学」で7位、「個別に親身になって就職相談にのってくれる職員が多い大学」で8位にランクされています。

全国には、豪華な図書館は作ったが利用する学生が少ないといった大学が沢山あります。どんな立派な施設を作っても、利用者が少なければ意味がありません。その点、本学の図書館は最近、夜まで利用する人が増える傾向にあり、大学として望ましいことだと思います。上記のランキングも、利用している人が多いことの証拠でしょう。利用者の数は、研究教育の質と相関関係にあります。同時に利用しやすいことも利用者を増やすことに寄与します。

しかし、関東の大手大学に比べれば、まだ利用率が低いし閉館時間も早いのが現実です。限られた予算の中で、それに負けない図書館にするにはどうしたら良いかを考えなければなりません。

その前提としてまず、図書館は大学の研究教育に資する役割を負っていることを、関係者が意識することが大切です。研究と教育の向上に役立つものでなければ、施設や希少本を売りものにしても意味がありません。教員と学生が利用するための便宜を改善することによって利用者を増やし、それによって研究教育レベルの向上を促進することが、立派な図書館を作ります。それを通じて、図書館職員も大学と社会のために役立つことになります。

本学の図書館をさらに利用しやすくするには、いろいろな方策が可能です。すぐ思いつくだけでも、(1) コンピューター検索システムが古くて使いにくい(福岡市立図書館のものと比べれば違いは明らか)、(2) 開架書庫に新しい図書と古い図書が混在していて、学生諸君はその違いを意識

せずに使っている(たとえばすでに改正された法律を、現行の法律としてレポートするなど)、(3) 閉架書庫内で調べ物や複写をするための環境がない(本格的な研究のためには書庫内でも長時間読書できるような机、複写機、照明器具が必要)、が挙げられます。

加えて、事務的な課題もあります。(1) 教員学生による図書購入希望から、発注・納本・登録・配架・予算処理までをコンピューターで一貫処理するシステムの導入(書名や著者名を何度も書く必要がなくなるので、本を早く配架できる)。

(2) 他の図書館との提携を強め、本学にない図書へのアクセスを広げる(とくに近隣の大学間で分担して新刊図書を購入し、共同で利用するなど)。

また、21世紀型図書館となるために、新しいメディアに対応した制度の見直しが必要とされます。いま考えるべき課題として、次の2つがあります。

(1) マルチメディア型の情報源に対応する設備と便益の提供(CD-ROMコレクションやインターネットデータベースへのアクセス提供など)、(2) 取り寄せサービスの導入(大学にない雑誌論文をFAXで取り寄せるなど)。

思いつくまま書きましたが、これらは私の一人よがりかもしれません。だから、独善におちいらないように、まず利用する人たちの声に耳を傾けるシステムを設けることが最優先されるべきでしょう。上述のうちでどれを先に進めるべきかなど、教職員と学生の皆さんの意見を聞きながら、可能なことから取り組みたいと思います。そこで、新図書館長として最初の仕事は、利用者の意見をできるだけ多く集めるような方法を考えることと、出された意見を無駄にしないシステムを設けること、であると考えます。

皆さんからの意見が、より利用しやすい図書館を作ることになります。ご意見は、図書館への投書又は私へのEメール(koga@seinan-gu.ac.jp)をご利用ください。(法学部教授)



福岡タワー展望室で語る歴史と史料

文学部国際文化学科教授 長 洋一

福岡市の北方には、博多湾とそれにつらなる玄界灘の海がひろがり、そこには昔からアジア大陸へ向かう舟の道があった。この街にはアジアに開かれていいる港があり、その歴史を誇っている。今、この街の百道浜にある福岡タワーの展望室に上がると、眼下にこの港の光景が広がって見え、多くの船が往来しているのが分る。ただしその海岸線は昔はもっと引っ込んでいて、このタワーの所も元は海の中である。

今は昔、1274年、蒙古軍の船が博多湾に押し寄せ、兵らが上陸しこの地の人々を苦しめた。その再度の来襲に備えて、当時の海岸線に沿って防塁が造られ、その一部が体育館の南に残っている。この防塁の研究として川添昭二氏の『(注解)元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』があり、関係史料を網羅し詳しい注解がつけられている。また波打ち際に造られた防塁と、その前を通る騎馬武者の姿をあざやかに描いた「竹崎季長絵詞」は有名だが、その複製の絵巻が図書館にある。防塁の構造は発掘調査の新資料で明らかとなり、当時の海岸線も明らかとなるが、柳田純孝氏の「元寇防塁と博多湾の地形」(中山平次郎著・岡崎敬校訂『古代乃博多』所収)はその成果をまとめている。この海岸に出来た防塁は7年後に再度来襲した蒙古軍の上陸を阻止した。防塁は西の今津の海岸から東は香椎の海岸まで造られたが、香椎の防塁の存否については論議があった。1957年、竹内理三氏は国東半島の史料調査の際、杵築市の生桑寺で古文書の断簡を発見し、これに香椎前浜の石築地のことが記されていた。この古文書の発見によって論議は終わる。

福岡タワーの展望室から海と海岸線を見て、展望室を南に廻って、福岡市の東方、南方、西方を見ると、市の三方はぐるっと山並みが連なって見える。ただ南の一部分だけが途切れている。そこに今は国道3号線、九州縦貫高速道、JR 鹿児島本線、西鉄大牟田線などが重なって通っていく。福岡市から平坦な道で南に行くのはそこしかない。ところがこの部分に古代の664年、大陸からの唐・新羅軍の侵略を防ぐため水城が造られた。これ

は高さ13メートル幅40メートル全長1.2キロメートルの土塁であり、土塁の博多湾側に幅60メートルの水濠が造られた。水城を造るにいたる経緯については、『日本書紀』の齊明天皇紀・天智天皇紀に述べられているし、その現状については『大宰府市史』の第一巻考古編に詳しい。しかし福岡タワーからその水城の方を見ていると、何故そのような奥まった所に防衛線が造られたのか不思議である。後の蒙古来襲のときには博多湾の海岸に防塁が造られ、博多の人々は守られた。

福岡タワーの展望室から見る、福岡市東の山並みの突端は航海の目印にもなる立花山である。室町時代、そこには山城が造られ、守護大名・戦国大名らの争奪の的となった。ところが貝原益軒は「筑前国統風土記」(『福岡県史資料・続四輯』)の中で、この山を二神山ふたがみとしている。この名前は、この山が古くは神の山として地域の人々の信仰の対象となっていたことを示す。貝原益軒の指摘はこの山の古い歴史を甦らせる。二神山(立花山)の北にある新宮町の町誌で、石井忠氏はその夜臼遺跡・三代遺跡には二神山を対象とした祭祀の跡があるという。また二神山の西南の香椎には二神神社があったと、香椎宮所蔵の『香椎宮編年記』に記されている。この神社は二神山を神体とした神社であり、編年記はこの神についての注で、この神を「春米氏ノ祖」としている。神の山としての二神山の祭祀を春米氏が行ったということである。春米氏は、528年の磐井の乱平定後、香椎の地方がヤマト王権の直轄地となったとき、そこを支配するためにきた氏族である。この春米氏が二神山の祭祀を行ったのはヤマト王権の政策だといえるし、ヤマト王権は536年には那津官家を置き博多の港を支配した。ヤマト王権のもとで、航海の目印となる二神山の祭祀と博多の港の支配とは関係をもち同時進行していく。『香椎宮編年記』の春米氏についての記述は、那津官家をめぐる歴史を解明する重要な史料である。

福岡タワー展望室から見て海岸線の変貌は分るが、史・資料の発見、新しい解釈によって、そこで語られる歴史像も変わっていく。

シンポジウム報告

「21世紀に向けた国際協力と市民社会」

ーNGOの役割、政府の役割ー



読賣新聞社 杉下氏

本学図書館はこの3月に、外務省の外郭団体である財団法人国際協力推進協会から、ODA、NGOなど国際協力に関する情報を広く一般に提供する機関である「国際協力プラザコーナー」の設置認可を受け、4月に（本館）国際機関資料室内に同コーナーをオープンした。このコーナーには、国際協力に関する図書、雑誌、その他様々な研修の要項等の無料配布物を置いている。このコーナーの設置を記念し、また本年度国際協力ネットワークセミナーの一環として、6月30日には標記シンポジウムが同協会との共催で開催された。

シンポジウム前日は記録的な大雨で開催が危ぶまれたが、当日は打って変わって良い天気恵まれ、参加者も350名を超え、会場となった2号館301教室では、立見もでるほどであった。

パネリストに、外務省経済協力局政策課長の目賀田周一郎氏、地雷廃絶日本キャンペーン（JCBL）運営委員の目加田説子氏、本学経済学部教授の吾郷健二氏の3名を迎え、コーディネーターには読賣新聞社解説部次長の杉下恒夫氏、総合司会は本学法学部教授の岩間徹氏が担当された。



経済学部 吾郷教授

まず、コーディネーターの杉下氏から「最近の社会のキーワードとして情報化、高齢化、国際化があげられる。情報化、高齢化についてはしっかり取り組みがなされているようだが、最近の不況の影響もあってか関心が国内に向かい、国際化だけが取り残されているような感じがする。今日のシンポジウムでは、今後この問題を民間レベルで、また国レベルでどう取り組んでいけばいいのかを考えていきたい。」との問題提起が行われた。

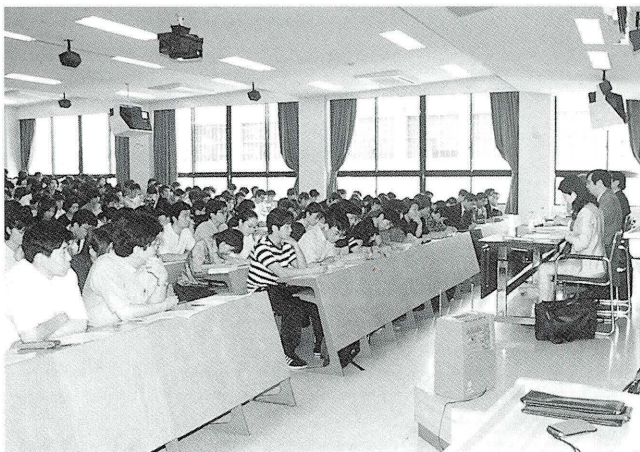
次いでパネリストの日頃の活動、そしてそれぞれの立場での国際協力に対する考えが述べられた。

(1)日本から見た国際協力

国際協力には様々な形があり、今回のパネリストはそれぞれ全く異なった立場から意見を述べられた。目賀田氏は、政府の役割として人道的な配慮を前提とし

ながらも、日本の国益を増進することを目的の一つとし、経済大国の国力に比する国際社会に対する責務として、また、海外依存型である日本国の将来の利益につながるようなものとして国際協力というものを捉えていると述べられた。

これに対して、目加田氏は、NGOの国際協力の考え方は一市民対一市民で、国境、国籍、人種などは関係なく行われるものであり、自分たちは日本人だから国際協力をやっているというような意識は全くと述べ、吾郷教授は、国際協力というのは人道主義的なものでもなく、自分に余裕があるから行うというものでもなく、



一人の人間としての責務であり、われわれが豊かなのは、貧しい人がいるからだという相互依存の意識が必要だとの意見が出された。

また、吾郷教授からは、今までの日本のODA政策に対して、もっと途上国の自助努力を促すような援助のやり方を行なうべきだとの意見も出された。これについて目賀田氏は、1996年OECDのDAC報告書にある日本が提唱した「新開発戦略」の中で、“人間中心の開発”ということが謳われており、最近では政府の国際協力の中身も少しずつ変わってきているとの補足説明があった。

(2)国民参加型の援助協力

国際協力という言葉、NGOあるいはNPOという言葉は最近よく耳にするようになったが、自分たちがどのように関わっていけるかについて意見が交わされた。コーディネーターの杉下氏からは、国とNGO、自治体、民間団体などが有機的に結びつけばより良い国際協力ができるとの意見が出された。

目加田氏からは、まだ日本では非営利団体の力は欧米に比べて脆弱であり、今まで、国が市民と協力してやっていくということではなかった。ただ、1989年頃からNGOに国からの資金援助が行なわれるようになった。世界的にも1992年にはリオの環境会議ではじめてNGOがオブザーバーとしてではなく、パートナーとして認められ、堂々と意見が述べられるようになった。それだけに、今までは数によるデモなどで要求していたものが、専門的知識を持たねばパートナーとしての活動ができなくなったが、そういう地位を与えられるようになった今こそ、国との協力がもっと必要になってきているとのことであった。

目賀田氏からは、NGOは政府と違い制約が少ないことから、対処のスピードが速かったり、また柔軟性があり、ODAとNGOはお互いに補完しあっている面がある。そしてその重要性が認識され、10年前からNGOの支援を行なっているし、その額も当初の10倍を超えているが、まだそれでも不足しているとの意見が出された。また、これから政府は、①いろんな面でODAがNGOを支援すること、②NGOの人材やノウハウを活用させてもらうこと、③ODAの事業をNGOに評価してもらったり、モニターになってもらうこと、④政策段階からNGOの意見を聞くことなどを重要と考えているとのことであった。

最後に吾郷教授からは、援助は何も国レベルだけでやるものではなく、市民の日常性のレベルで行なうという日本人の意識改革が必要であり、またNGOは政府と同等なレベルになることが必要であると締めくくられた。

この後、質疑応答が行なわれ、主催者である財団国際協力推進協会塚田部長の閉会挨拶をもってシンポを終了した。

全体を通して入場者の国際協力への関心の深さが感じられ、シンポ終了後もパネリストに熱心に質問する姿も見られた。欲を言えば、もう少し時間があればという感じがした。

このシンポが本学における国際協力に関する意識発揚のきっかけとなればと願うとともに、図書館内の国際協力プラザコーナーを充分に活用していただければと思っている。

(文責 情報サービス課係長 古庄 敬文)



外務省 目賀田氏



地雷廃絶日本キャンペーン
運営委員 目加田氏



図書館で使える CD-ROM

新しい情報検索ツール

図書館には図書だけではなく、雑誌、新聞、ビデオ、マイクロフィルム等様々な資料があります。その中でも、CD-ROMは新しい形態の便利な図書館資料として最近増えてきました。

CD-ROMの特長としては、

1. 大容量（1枚で何十冊分のデータを収録）
2. 高度な検索機能（網羅的な探索が可能）
3. 無料（オンライン検索と違い使用料が不要）

などがあげられ、膨大な資料の中から必要な情報を正確かつ迅速に検索することのできるCD-ROMの活用は、今後資料収集において欠かせないものとなってきています。

今回は、西南学院大学図書館に所蔵されているCD-ROMの中から特に便利なものをご紹介します。

《雑誌記事を検索するには》

雑誌記事索引 1985～1994

国立国会図書館が作成していた「雑誌記事索引」（第一参考図書039.0.7-）をCD-ROM化したものです。自分が調べているテーマについてどんな雑誌記事があり、その記事が何巻何号に掲載されているかを探すことができます。

題名、論題中の用語、著者名、雑誌名等から検索できます。

《新聞記事を検索するには》

CD-HIASK 1992～

朝日新聞のCD-ROMで、1枚に1年間分の全文記事情報が収録されています。

キーワード、主題分類、国別・国内地域別分類、発行日等から検索できます。

朝日新聞号外 1879～1998

朝日新聞号外約5,000紙面および、主な事件や出来事の解説が収録されています。

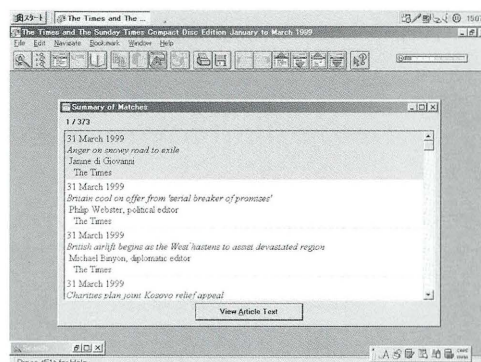
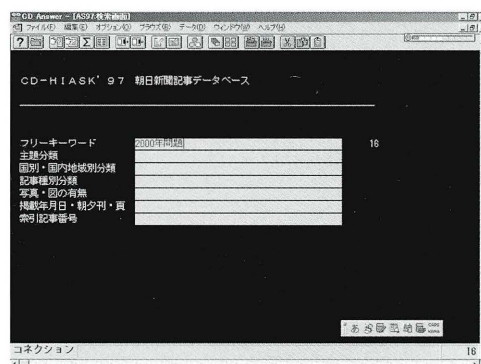
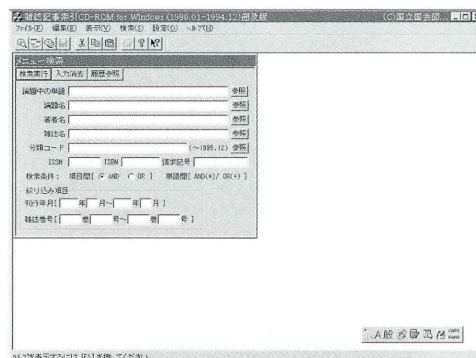
キーワード、発行年月日、分類（テーマ別）の3通りの検索が可能です。

The Times and The Sunday Times 1999～

英国の代表紙 The Times 及び The Sunday Times を3ヶ月毎に1枚のCD-ROMに収録したものです。

キーワード、発行日から検索できます。

これらの資料については、カウンターで申込み手続きをした後、S A I N Sルームで利用できます。詳しくは閲覧カウンターにおたずねください。



新着図書・視聴覚資料紹介

図 書

<書名／編著者／出版社／請求記号>

図書館で遊ぼう—知的発見のすすめ／辻 由美／
講談社／09K.010.1大学生と「情報の活用」情報検索入門／長尾 真
／京都大学図書館情報学研究会／007.5.37
よくわかる哲学のはなし／鷲田小彌太／東京書籍
／104.0.163新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか／
加藤 隆／大修館書店／193.5.28西欧の眼に映ったアフリカ：黒人差別のイデオロ
ギー／岡倉登志／明石書店／240.04.1代表的日本人／内村鑑三；稲盛和夫訳／
講談社インターナショナル／281.04.32ベルテルスマン世界地図帳（日本版）／昭文社／
290.38.39インターネットで学ぶアメリカ政治の基礎知識／
R.A. モース／麗澤大学出版会／312.53.87
情報公開法の逐条解説／宇賀克也／有斐閣／
316.1.162日本と中国永遠の誤解：異母文化の衝突／
稲垣 武／文藝春秋／319.1022.28判例に学会社法演習講座／西脇俊男他／
八千代出版／325.2.244基本問題セミナー民事訴訟法／鈴木重勝他／
一粒社／327.2.232ミクロ・エコノミックス／是松正啓他／
九州大学出版会／331.Ko79.2経済原論入門／相田愼一／ナカニシヤ出版／
331.6A24.1中国経済発展論／中兼和津次／有斐閣／
332.22.413EU の法的課題／石川 明他／
慶応義塾大学出版会／333.7.90図解連結経営／小宮一慶／東洋経済新報社／
336.92.164国際金融のすべて／奥田宏司他／法律文化社／
338.9.68テキスト社会学／小坂勝昭他／ミネルヴァ書房／
361.Ko82.1法と正義のディスクール：ハーバーマス京都講演
集／Habermas, J.／未来社／361.234H11.2国際文化学への招待：衝突する文化、共生する文
化／島根國士／新評論／361.5.175組織の心理学（新版）／田尾雅夫／有斐閣／
366.94.31公的扶助論（社会福祉選書）／小林結迪夫／
建帛社／369.2.36教育概論／田原恭蔵他／法律文化社／371.0.68
フレーベル教育思想の研究／倉岡正雄／風間書房
／371.234.33英語授業の大技・小技／静 鉄人／研究社出版／
375.893.37大学力を創る：FD ハンドブック／
大学セミナーハウス／東信堂／377.15.36食べることの社会学：食・身体・自己／Lupton,
Deborah／新曜社／383.8.129統計学の基礎の応用／張 南／中央経済社／
417.0.138物理学の20世紀／「科学朝日」編／朝日新聞社／
420.2.20生命系：生物多様性の新しい考え／岩槻邦男／
岩波書店／460.4.50医療と文化／リン・ペイヤー／世界思想社／
490.2.15脳と認知の心理学：左脳と右脳の世界／永江誠司
／ブレーン出版／491.371.74環境評価入門／鷲田豊明／勁草書房／519.0.237
インターネット「超」活用法／野口悠紀雄／
講談社／547.48.319日本の産業・貿易の経済分析／小宮隆太郎／
東洋経済新報社／601.1.106マーケティング論の基礎／猿渡敏公／中央経済社
／675.Sa56.1戦後流通のダイナミズム／宮内拓智／
税務経理協会／675.4.148日本芸能史／阪口弘之／昭和堂／770.21.1
運動反応の心理メカニズム／志堂寺和則／
九州大学出版会／780.14.25生成言語学入門／井上和他／大修館書店／
801.0.268日本語どこへ行く／井上ひさし／岩波書店／
810.4.147中国語常用実用会話集／梁 春香／
南雲堂フェニックス／827.8.33語学王ドイツ語（CD ブック）／大友展也／
三修社／840.0.10

スクリーンの英文学：読まれる女、映される女／

今泉容子／彩流社／930.2.43

自然と文明：アメリカの西部小説を読む／

石 一郎／南雲堂／930.29.101

ビ デ オ

京の四季（春・夏・秋・冬全4巻）／JR 東海／

カラー・各45分／216.VT.KYO

入門コミュニケーションの技術スキル（全3巻）

／深沢道子／カラー／361.VT.NYU

NHKスペシャル家族の肖像（全11巻）／

NHKソフトウェア／カラー・各50分／

367.VT.KAZ

フランス人の身ぶり入門（全1巻）／大木充他／

駿河台出版社／カラー／801.VT.FUR

（上記は、1999（平成11）年6月～9月新着図書〈和書〉
・視聴覚資料の一部です。）

お 知 ら せ

◎卒業論文貸出について

卒業論文作成のために必要な図書を帯出される
ときは、カウンターで申し込みをしてください。

貸出期間 30日（更新不可）

貸出冊数 5冊

◎休暇期間の長期貸出

冬季休暇貸出

受付開始12月9日（木）→返却期限1月11日（火）

春季休暇貸出

受付開始1月20日（木）→返却期限4月3日（月）

◎休館日

11月13日（土）大学祭期間

12月25日（土）キリスト降誕祭

12月27日（月）正午～1月5日（木）年末年始休暇

2月7日（月）～10日（木）大学入試期間

《人事異動》

◎補職

（1999.7.1～2001.6.30）

図書館長	新 任 者	前 任 者
	教授 古賀 衛（法）	教授 岩間 徹（法）

（1999.7.1～2000.6.30）

図書館委員	新 任 者	前 任 者
（神 学）	教授 寺園 喜基	教授 寺園 喜基
（英 文）	教授 久屋 孝夫	教授 江崎 義彦
（フランス語）	教授 太田 和男	助教授 真下 弘子
（商 学）	助教授 王 忠毅	助教授 王 忠毅
（経済学）	教授 相模 裕一	教授 村岡 伸秋
（法 学）	教授 神宮 典夫	講師 山田 憲一

（児童教育）	教授 生野 金三	教授 生野 金三
（国際文化）	教授 岩尾龍太郎	教授 岩尾龍太郎

7月1日付

整理課課長補佐 佐藤 誠 学術研究所事務室長
に配転・昇進

学術研究所事務室長 今永 義純 図書館神学部
分館移転担当課長に配転

《図書館委員会》

5月7日（金）

報告 ①国際協力プラザコーナーの認可（開設）
について

②図書館ホームページの公開について

議題 ①1999（平成11）年度私大助成申請および高
額図書購入申し込みについて

②1999（平成11）年度共通研究図書費、一般
図書費および新聞雑誌費の配分について

6月23日（水）

議題 ①1999（平成11）年度図書館点検評価委員の
委嘱について

②外国新聞の保存および廃棄について

編 集 後 記

今回の秋季号は、本年4月、国際関係資料室内
に国際協力プラザコーナーを開設しましたので、
それに関連した「シンポジウム報告」を掲載して
います。

灯火親しむ、読書にふさわしい季節になりました。
皆さんの館内読書での新たな「エウレーカ（ギリシア
語：見つけたという意）」に期待しています。（Y. M）